



有形文化財（工芸品）

38. 正院焼遊鯉文大鉢 しょういんやきゆうりもんおおぼち 1口 くち

■指定年月日 昭和42年5月22日(1967)

■寸法 径38.7cm 高11.8cm 高台径18.3cm

■所在地 上戸町北方

■所有者 個人

正院村（現在の正院町）で、弥蔵（次兵衛）が焼いた正院焼の大平鉢である。おもに黒色と黄色のうわぐすりを使って鯉を一尾描き、その横に、「天保丙申冬遊于能州正院陶舍平安文龍（花押）」と書いてある。天保7年（1836）冬に平安文龍なる人物が来訪し、絵付けをしたことがわかる。奥能登には、文龍の銘がはいった絵馬など数多くの作品が残っており、谷文晁ぶんちやうの弟子で越後の絵師、長谷川文龍ではないかといわれている。

弥蔵は染め物が本職で、須受八幡宮すずはちまんぐうに紺屋次兵衛の銘がはいった龍の幟旗のぼりぼたが残る。文政(1818-1830)頃に越中瀬戸風の陶器を焼きはじめ、さらに九谷いづえの色絵を学び、吉田屋風の素晴らしい作品を残した。

色絵の生産は、金沢の商人が手引きしたものらしく、城下で多く流通している。この大鉢は、その中でも製作年代や絵付け師が分かる点で、特色のあるものである。地元では弥蔵焼ともいう。

珠洲の江戸時代の終わりごろの産業や文化を調べる資料として重要である。